

主張

地域に開かれた学校づくりを通して

田中宏志

近年、「ヤングケアラー」という問題がクローズアップされ、地域や学校でその対応を進めていかなければいけない時代になっています。この問題は、家庭内のデリケートな問題であること、本人や家族に自覚がないという理由から、支援が必要であっても表面化しにくいという特徴があります。

石川県では、昨年度、「ヤングケアラー実態調査」を実施しました。調査では、「世話をしている家族がいる」と回答した小学六年生は八％、中学二年生は五％、高校二年生は三％という結果が出ており、支援が必要な子供たちが少なからず存在していることが分かります。特に着目すべきは、世話をしている家族が「いる」と答えた児童生徒への質問のうち、「世話をしているために、やりたいけれどできていないこと」への回答が、いずれの層でも「特にない」という答えが六割前後と非常に高いということです。

日本の家庭には「お手伝い」という習慣があり、子供たちにとって大切な家族のために何かをすることは、当たり前なのかもしれません。しかし、本来、大人がしなければいけないことを子供にさせることは「お手伝い」ではなく、子供たちにさせてはいけないことだと考えます。この問題の難しさは、調査から踏まえると、子供たちの負担感の低





さから、なかなか表面化しないということだと思えます。

この問題に対応するために、金沢市では、「金沢市ヤングケアラー支援に関する検討会」を立ち上げ、子供たちにとどのような支援をするべきか、どのように多機関の連携を図っていくかを検討しています。これらの行政の動きを受けて、学校運営を託されている私たちがすべきことは何かを、校長として考えていく必要があります。

私の勤務する学校は、金沢市より小規模特認校の指定を受け、地元の子供たちだけではなく、広く市内から通う子供たちがあります。小中併設校であるこの学校に赴任したとき、共に働く教職員にお願いしたことは、「信」を得るということです。私自身や教職員が、子供たちや保護者、地域から「信」を得るためには、「開かれた学校づくり」が大切だと考えます。四月に行われたスクールフォーラムでは、学校の取組を紹介するとともに、学校評価で明らかになった課題について説明しました。その席で、「校長室は、いつでもドアを開いてお待ちしているので、いつでもお越しください。」と投げかけています。教職員は、ホームページや学級だよりなどとおして、子供たちの様子を保護者や地域に伝えています。おかげさまで、多くの保護者の方や地域の方から御意見や相談、情報を受ける機会が増えてきました。その声に傾聴することで、少しずつ信頼を得ている手応えを感じています。

社会の変化が多様化する今の時代、「ヤングケアラー」などの新たな問題を解決していくためには、関係機関と連携するとともに、保護者や地域とのつながりを確かなものとし、ともに信頼し協力できる学校づくりが大切なのだと思えます。

(全日中副会長・金沢市立医王山中学校長)